

大西弘高 著

書 評

新医学教育学入門 教育者中心から学習者中心へ

岩田健太郎 (亀田総合病院総合診療教育部感染症内科)

「君は、前期 48 点、後期 49 点だった。平均 50 点ない者は不合格にしたんだ。でも、前期 30 点、後期 60 点だった者は、努力の跡が見られたから合格にした。まっ、もう 1 年やってくれ」

こう言い捨てられ、本書の筆者である大西弘高氏は留年の憂き目にあう。挫折を、それも理不尽な挫折を味わった経験を持つ者なら、これが若い心にどのくらい深い傷跡を残すか容易に想像できるだろう。もちろん、当時は「理不尽な世界」は「大人の世界」であり、「おまえも早く大人になれよ」と諭されるのであるが、これが「まやかし」や「ごまかし」とほぼ同義語であることを知るのに、そう時間はかからない。

医学生時代に受けた教育の半分以上は退屈なものであった。自分の研究データを誰にともなくつぶやき続ける講師、目標も希薄な実験をマニュアル通りにこなすだけの実習、1 時間に 100 枚以上のスライドをペラペラめくって、「おまえら全然理解できていないな」と豪語する教授。教育者は偉く、学習者は見下げられた存在である。「それはおまえが理解していないせいだ」と言われれば、ぐうの音も出ず、こうして教育者の都合で、大西氏の言葉で表現するなら、「教育者中心」に医学教育はそのレベルの低さの excuse を与え続けてきた。「ああはなりたくない」。教える立場に立った今、こう考える。私も「学習者中心」にと願う大西氏同様、反面教師の皮肉な恩恵を受けていた。

一方、現場で教育に没頭する毎日の中で、「教育学」の教科書には縁が遠かった。何冊か、古典といわれるものは読んだし、「専門家」といわれる人たちの話も聞いた。が、どこか嘘くさかったし、自分とは関係のない世界の話、という感じがした。

米国では、ACGME (accreditation council for graduate medical education) が定めるガイドラインが整備されている。が、形ばかりのシステム整備には、ときに胡散臭さがつきまとう。ビジネスに忙しく、名門大学所属というタイトルだけが大事なパートタイムの教官は、ご機嫌取りに毒にも薬にもならない評価表を埋めることがしばしばだったし、研修医もずるいもので、足りない手技をねつ造してなんとか研修修了したりしていた。形だけ取り繕ってもダメだ、アウトカムを伴わなければ、と強く思った。

日本は日本で、「教育学の大家」と呼ばれる人が難解な専門用語を乱発するも肝心の彼自身の講義は退屈きわまりなく、その自家撞着に気がつく様子もなく、かなりがっかりしたものだ。どうも教育学とは、われわれとは関係のない偉い人がやっているものだ、という偏見が抜けなかった。

そこで、本書である。「教育とはかくあるべし」と

は言わない。「教育とは何か?」とタイトルがある。「評価はこうやる」ではなく、「評価とは?」である。そこには、基本的なコンセプトや専門用語の解説にとどまらず、「なぜ教えるのか」「なぜ評価するのか」という基本的な筆者の問いを感じる。実践面に変な気を配っており、「本来の評価の意味(94 ページ)」を考え、プロダクトの確認、保証を考えている(第 16 章 評価とは?)。学習者は何を求めているのか?(第 10 章)、診断能力の獲得(第 25 章)といった、教育者というより、一臨床家として極めて関心の深い命題についても、理念(principle)と実践(practice)をほどよく織り交ぜて解説している。カリキュラムなどの、形式整備だけにとらわれず、「アウトカム」を大事にしているのも、すばらしい。こうしたなかで、これまで現場の人間が取つきにくかった「一般目標」「個別目標」「タキソノミー」「教育方略(strategy)」といった用語に慣れ親しむことができる(それにしてもまずい訳語だとは思いうけれども、尤度比とか、方略とか、どうもこの分野の訳出者はセンスがない。likelihood, strategy といった言葉は日常会話でもよく用いられるが、「方略」なんて彼女の前で言ったら、ふられるのが落ちであろう)。

教育者が漠然と行う教育は、やもすると独善的になりやすい。自らの行動を明確に言語化し、相対化するためにも、本書は大変有用である。

イリノイ大学医学教育部で研鑽を積まれた筆者であるが、そこで終わらなかつたところもすばらしい。大西氏を特徴づけているのは、マレーシアの国際医学大学での経験だと思う。閉鎖的にコクサイ主義に走るのでもなく、米国一辺倒のゆがんだ「コクサイ主義」に陥るのでもなく、大西氏はこう述べる。「アジア各国が互いに協力し、切磋琢磨しながら医学教育について学んでいるのは、医学教育を政策として考えたときに、自分の国の中で実験するのが困難だからという理由が大きいに思えます。特に米国、英国という医学教育に関する二大勢力は互いにかなり異なり、これらのいい部分をうまく取り入れたいという気持ちはアジア各国の医学教育改革に共通していると感じます(158 ページ)」。こういった観点から、医学教育における「国際的な連携」を訴えた例は希有である。

医学教育そのものにも「方略」strategy、は必要であるが、医学教育組織改革にも戦略性 strategy は欠かせない。広い視野と戦略性、真の国際性を兼ねそろえた医学教育環境の充実のため、大西氏のますますのご活躍をお祈りするとともに、本書を強く推薦する次第である。

(A5 判 176 頁 定価 2,310 円(本体 2,200 円+税 5%))
2005 年 医学書院 刊